

D紙芝居 Volume④ (脚本)

白山争論 (はくさんそうろん)



——天領 (てんりょう) となった白山麓十八カ村

奈良時代、ひとりの山の修行者が白山の山頂に初めて登ります。平安時代になると越前(福井)・美濃(岐阜)・加賀(石川)から白山山頂参詣(さんけい)のための登山道が開かれます。この道を禅定道(ぜんじょうどう)といい、そのスタート地点を馬場(ばんば)といいます。日本全国から白山の仏や神のありがたさに触れようと多くの人々が訪れるようになりました。頂上付近には加賀室、越前室などの山の宿泊施設である室堂が建てられ、麓(ふもと)には温泉で病気を治すための湯治場(とうじば)も営まれ、にぎわいがやってきます。一般の人々が集まるようになると、登山の案内人が雇われ、御札や縁起物(えんぎもの)、登山のための食糧や草鞋(わらじ)が売られます。賽銭(さいせん)など白山麓の村に落とされる現金は、村々を豊かに潤すのでした。それは白山の仏や神からもたらされる貴重な恵みといえるのかもしれませんが。

白山争論といわれる越前・加賀の人々の白山の仏や神の恵みをだれが手にするかという争いは、記録に残るだけでも平安時代から明治初年に至るまで繰り返され続けます。主な争いには戦国時代の天文(てんぶん)の争論、江戸時代の明暦寛文(めいれきかんぶん)の争論があります。ここでは10年余り争った明暦寛文年間(1655-1668)の争論を取り上げます。結果として牛首村(白峰)ほか16カ村(幕府領越前藩預かり地)と尾添・荒谷2カ村(加賀藩領)が江戸幕府によって召し上げになり、白山麓18カ村がまとめて徳川幕府領である天領(てんりょう)となります。

この物語は、白山山頂と禅定道支配を巡る白山麓の人々のお話です。

登場人物(年齢は明暦寛文の頃の凡その年齢です)

加賀五代藩主前田綱紀 1643 - 1724・正保2年(1645)3歳で家督を継ぐ(13-25歳代)

加賀馬場白山宮(現在の白山ヒメ神社)(惣長吏 澄意 20歳代)

主人公=加賀尾添村百姓/吉兵衛(20-30歳代)

越前馬場平泉寺(現在の白山神社)

主人公=越前牛首村土豪(白山麓16カ村の殿さま)/四代目加藤籐兵衛(20-30歳代)

*暦は旧暦です。新暦では約一カ月加算してください。

D紙芝居④ 白山争論——天領になった白山麓18カ村

構成	Visual	Narration
----	--------	-----------

F-1 【加賀禪定道】



白山の山頂には、大女の峰、御前の峰、剣の峰の三つの頂がそびえています。火口湖が水をたたえ、噴気が立ちあがっていました。

江戸時代の初め頃、明暦元年（1655）夏6月、所々に雪が残る白山の登山道である加賀禪定道を数十名ほどの加賀衆一行が登っていました。金沢城からやってきた役人と大工の棟梁に率いられ、加賀領尾添村の百姓たちが蟻のように列を作っていました。

加賀藩主の命令によって、風や雪によってこわれた頂上のお堂、白山堂を建て替えるために登っていました。白山堂には白山の仏さまの像が祀られていたのです。大女の峰には阿弥陀如来、御前の峰には十一面観音がいらっしゃいました。一日も早く仏さまを雪や雨、風から守る必要がありました。

F-2 【天池の室】

尾添村百姓吉平衛「今日の夜は天池の室に泊まります。明くる朝は、大女の峰まで足を延ばし、こわれた白山堂の様子を調べたいと思います」



吉平衛は尾根の道を歩く金沢城から来た役人に声をかけます。夜明け前から登り始めた山道に慣れないか、役人は荒げた息を継いでひとつ頷き、腰に下げた手ぬぐいで吹きだす汗をぬぐっていました。

F-3 【白山禪頂六道の堂】

加賀領尾添村の動きを知った越前領牛首村（現白峰）は雪解けを待たず、いち早く行動ははじめました。

牛首村殿様加藤籐兵衛「丈夫な石倉を築くのじゃ。鉄砲を撃ちかけるために鉄砲狭間を作るのを忘れるではないぞ。特に北側には多く切るのじゃ」



白山頂上西側にそびえる御前の峰の直下、六道の堂には丈夫な石倉が姿を現しています。高い山の山頂とは思われない、大きな石の壁を築き上げていました。壁には弓や鉄砲が撃てるように、沢山の鉄砲狭間である窓が空けられています。

百名余りもいるでしょうか、わら縄で編んだもっこに石を載せ若者たちが石を運び、手際よく石の壁を築いていました。石を集めるのも大変です。

明暦元年（1655）の遅い春がやってきたころ、越前牛首谷の殿さま、加藤籐兵衛から出陣の命令が牛首の谷々16カ村の長へ伝えられていました。練りに練った計画と手配に漏れはないと確信していたのです。兵の食糧も万全です。越前馬場平泉寺への後ろ盾の約束を取り付け、越前藩への根回しも忘れてはいません。

F-4 【牛首谷の村々の若衆が出陣】



越前側牛首谷では親子三代、四代にわたって、加賀側尾添谷の村々と白山の恵みを取り合って、何度も合戦に及んでいました。負けたり勝ったり、牛首谷の村々が生きてゆくための戦いでした。

長年にわたり積もり積もった争いに決着をつけることができると、牛首村加藤籐兵衛は決意していました。

加藤籐兵衛「18から20代の若者を村ごとに20名ずつ、5月20日を目途に牛首村へ集まるよう。その際は、弓、鉄砲、槍を準備せよ。2日分の食糧も持って村を出るように」

と細かく指示をだしていました。秘かに里の町、鶴来から武器弾薬、食糧も集め、戦の準備をしていたのです。

6月1日の白山の山開きを待たず、残る雪を乗り越え、加藤籐兵衛を総大将に百数十名の軍勢を山頂の宿、越前室へ送り込んでいました。尾根の各所に中継地点を設け10名20名と武装した牛首谷の兵を置き、補給にも気を配っていました。

F-5 【白山頂上で合戦】



加賀衆が天池の室を朝早く出て四塚、北竜ヶ馬場に至ります。大汝の峰と六道の堂あたりに大勢の人が動いているではありませんか。

藩役人「あれは越前の者か、だれか挨拶をしてみいれ」

と尾添村吉平衛に命じました。風や雪に耐えて背の低い這い松の平原が尽きる頃、大汝の峰のふもとに着きます。突然、加賀衆は鉄砲を撃ちかけられます。

尾添村吉平衛「われらは加賀尾添の百姓である。怪しいものではない。白山山頂にある御堂、白山堂修理のためにやってきた者だ」

越前牛首加藤籐兵衛「何を血迷ったことを申す。白山堂はわれら越前牛首が修理するのが道理じゃ。加賀の者どもに指一本も触れさせぬ」

吉平衛「おかしなことをいう、われらは京都の朝廷さまからお許しを得ておるのじゃ。加賀が、われら尾添衆が、白山堂の修理を行うのが古くからの習わしであろう」

F-6 【白山頂上での合戦】

籐兵衛「ええい、つべこべぬかすな。山を下りなければ撃ち殺してくれるわ、覚悟せい」



手にした鞭を一振りすると、それを合図に石倉から鉄砲がつぎつぎに放たれます。右、左と撃ってくる鉄砲にさらに弓矢です。

吉平衛「こりゃ、たまらんわい」

加賀衆が持参した鉄砲は、熊威^{くまおど}し用のただの一丁しかありません。撃ち返すことなどできませんでした。

F-7 【加賀の村々では寄り合い、合戦を決意】

加賀禅定道を駆けるようにして、ふもとの尾添村まで下山すると金沢城へ馬で使者を送ります。隣の国、越前藩との諍^{いさか}いの経緯を報せます。報せを聞いた金沢城内では驚き、白山麓^{いしか}の尾添村へは武器をもって戦うことを避けるように、早まった行動をしないようにとさとし、なだめます。



一方、尾添村でも毎晩のように寄り合いが持たれ刀や槍が持ちだされます。尾添村は、加賀一向一揆を戦い抜いた誇り高い山内衆の末裔^{まつえい}です。

「われらの村が、天正十年（1582）の合戦の折、越前の者どもに攻められ村ごと全滅にされたことを忘れてはいない。爺様、婆様たちの仇を取るのじゃ」と話し合われていました。加賀一向一揆から敵方へ寝返った越前衆、またもや戦いを仕掛けてきた越前衆の乱暴を前に、場合によっては戦うことも選ぶと決めます。戦さの準備をするとともに、尾添村から加賀側白山麓の村々、中宮、瀬戸、木滑、吉野、鳥越などにも報せが走ります。各村々でも寄り合いが連日開かれていました。尾添衆に味方し、越前衆との合戦もやむを得ないと怒りをあらわに戦さの準備をします。

F-8 【越前藩主松平光道の書状使者、加賀藩への抗議文】

越前藩使者「白山は、越前馬場平泉寺の寺領である。従って、越前牛首村が白山山頂の白山堂の修理をするのは当然である。われら越前の方へ何ら相談もなく、加賀領尾添の者どもが大工を伴って大勢で白山山頂へ登り来たること、無礼である」



越前馬場平泉寺を後ろ盾にした牛首村からの訴えを受け、越前藩が抗議してきたのです。

この度の白山山頂の白山堂修理は、突然亡くなった加賀藩前藩主の供養を願って取りかかったものでしたが、何事もなかったかのように加賀藩は沈黙を守ります。

越前藩と国の境を争い、武器を持っての戦いとなれば、加賀藩は取り潰しなど幕府からどのような咎めが来るかもしれません。

F-9 【加賀馬場白山宮（現白山ヒメ神社）の長、朝廷に働きかけ】

白山山頂で越前牛首衆が加賀尾添衆を多数の鉄砲で戦いを仕掛けてきてからすでに十年余りが過ぎてゆきました。



寛文六年（1666）、時の加賀馬場白山宮（現白山ヒメ神社）の長が京都へ上り、朝廷に働きかけをします。再び朝廷から白山山頂の管理を正式に加賀馬場へ任命されます。

加賀尾添村では加賀馬場白山宮の長に、京に上り朝廷に願いでるよう説得していたのです。

加賀馬場白山宮の長澄意「この度、朝廷より加賀馬場が白山山頂の白山堂を修復し、管理するようにと再び任ぜられた。従って越前衆には何の遠慮もいらぬ。これより白山山頂に登り、我らがこの手で白山堂の修理を行うのじゃ」

これを聞いた尾添村の百姓衆は、喜び勇んだことは言うまでもありません。

しかし、加賀衆の動きを知った越前牛首衆は、牛首谷16カ村に出陣を命令して兵を集め、白山山頂に待ち構えていたのです。加賀衆が山頂に近づくと有無を言わず石倉から鉄砲玉を撃ちかけてきます。

朝廷の権威は無視され、加賀衆は、またもや手ひどく追い返されてしまいます。

F-10 金沢城内広間・重臣たち評定（会議）



寛文八年（1668）、白山を巡る度重なる争いを嫌った加賀藩は尾添村など二カ村を幕府に返上することを願い出ます。争ってまで領地を持っていることよりも、おとなしく頭を下げることで幕府の権威に従い、加賀藩が無事に生き延びることを選びます。

加賀藩重臣「尾添、荒谷村を幕府にお返しすることは、加賀領民である二カ村の百姓を捨てることとなります。白山麓二カ村の百姓に慈悲をかけ、気持ちを聞いてやることも重要なことと存じます」

F-11 【尾添道場の囲炉裏を中心に寄り合い】

幕府に召し上げられると告げられた尾添、荒谷の村でも、繰り返し村の寄り合いを開いていました。

尾添村肝煎吉平衛「皆の衆、望むものは、今まで通り加賀の領民になることを金沢



の御城に願い出て許しを請おうと思う。先祖が残してくれた村を出ることは切ないが、生きてゆくためじゃ。残る者も仇とも思える越前の衆に頭を下げねばならぬ。苦勞はいずれも同じじゃ。望みがあれば、加賀領内に新しく開く土地を願い出る、遠慮なく申しでてくれ」

二村の百姓と加賀藩の思惑が重なります。結果、二カ村から移住を願い出た者には、加賀藩の能登に新しい村を開くための土地が与えられることになりました。

能登門前山是清に尾添村吉平衛に率いられた尾添村の百姓、22軒91名の百姓が入り、加賀領の百姓となります。

F-12 【牛首土豪加藤籐兵衛、追放】

加藤籐兵衛「わしは生まれてくるのが少し遅かったようじゃ。親父殿は牛首村に用水、ミンジャを引いて飲み水はむろん、田畑への水も潤した。百万石の加賀殿を相手取って、領地の争いをもした。牛首谷の者どもは、それゆえ我が加藤家を“殿”と呼んでくれていた。感謝と喜び、何よりも尊敬をしてくれていた筈じゃ……」



牛首谷の殿様といわれた加藤籐兵衛は、越前藩からも煙たがられるようになっていました。越前藩では「籐兵衛は、いまだ年若く経験もないものである。常々乱暴者でいたずらものである」と幕府へ報告し、白山山頂をめぐる争いの全責任を籐兵衛に負わせます。

何年も、争いの度ごとに武器を持って動員されることに嫌気を

さした牛首の谷々16カ村の村人からも見放されていました。
とうとう延宝元年(1673)、加藤籐兵衛は幕府によって牛首の「殿」
の地位を奪われ越前大野の向こうへ追放されます。

白山山頂の仏や神を祀る権利と白山の仏と神が与えてくれる恵
みをだれが手にするかという争いは、越前馬場平泉寺と牛首村
に対して加賀馬場白山宮と尾添村の間でさらに続きます。一山
の支配を進める越前馬場平泉寺によって牛首村は入山を禁じら
れますが、尾添村は平泉寺の圧力を撥ね退け、加賀禪定道を守
り通し手放すことはありませんでした。